

High End 2013 in Munich

＝ミュンヘン・ハイエンドショーの新たな熱風＝

森 芳久 編集委員

今年もまた、5月9日から12日まで、世界最大規模のオーディオショー、High End 2013 in Munich が開催された。その名の通り、ハイエンドオーディオに特化したこのショーは、今や世界のオーディオ・ファンが集う最も人気が高く、会場となっているミュンヘンの M.O.C (ミュンヘン・オペレーティング・センター) はオーディオ巡礼者のメッカとなっている。

オーディオ不況と叫ばれてから既に久しく、各国でのオーディオショーの規模縮小がつづく中、ここミュンヘンでは昨年と同様に年々規模を拡大してきている。事実、今年も出展者は昨年の 366 社には僅か及ばなかったが、35 カ国から 363 社が集い、また 71 カ国から 5,211 名もの業界関係者が駆けつけ、前年を 18% も上回っている。実質的な入場者も 16,159 名と近年では最高を記録した (表 1 参照)。

(表 1) 2011 年から 2013 年まで、直近のショーの推移

	2011 年	2012 年	2013 年	対前年比%
会場スペース	約 20,000 m ²	←	←	+/- 0
出展者数	337	366	363	-1
報道関係者数	437	483	481	+/- 0
業界関係入場者数	4,398	4,427	5,221	+18
一般入場者数	9,681	10,244	10,948	+7
トータル入場者数	14,079	14,671	16,159	+10

但し、トータル入場者数には報道関係者、また出展者バッジを持った 2,226 名は含まれていない。

このショーの大きな特徴は、最新技術を駆使した製品が紹介されている一方、真空管アンプやアナログレコード、そしてその関連製品も堂々と主役を務めていることであろう。このショーでは“ガラケー”などという言葉を発する不敬者は居らず、尊敬と憧れでそれらの商品に聴きほれる人々の姿をあちらこちらで見かけることができる。アナログレコードの展示即売コーナーに人だかりが絶えないのもお馴染みの風景だ。

そんな中で、今年目立ちはじめたのが、小型の機器やハイレゾのダウンロードミュージックだ。現在でも重厚長大の機器は少なくないが、そんな中であって人目を引いていたのが、スマートな小型のオーディオ機器である。デスクやシェルフに置いて、格好良く良質のオーディオを楽しむライフスタイルの提案だ。ハイエンドオーディオの世界にも省エネ、エコという概念が取り入れられてきたことは、技術的観点からも大いに歓迎されることと言えよう。また、もう一つの特徴がハイエンドのプログラムソースとして重要な位置を占めはじめたハイレゾのダウンロードミュージックやそれをサポートする機器の登場である。ハイエンドのプログラムソースとしてはパッケージメディアの SA-CD が健闘しているが、ここでは年々、ダウンロードミュージックの勢力

が広がってきていることを強く感じる。多くのブースで Mac が CD や SA-CD プレーヤーに代わって、ダウンロードミュージックを演奏している。

毎回このショーをレポートしてきたので重複するが、このショーの大きな魅力は、1,000 を超える世界のブランドが一堂に会することはもちろん、それを運営するドイツ・ハイエンド協会の周到な準備とエンターテインメント精神が伝わってくることである。

こうした地道でたゆまない努力は、直近の出展規模や入場者数の推移に表れている。毎回、注釈を入れているがこの数字はいわゆる“公称数字”という水増しなどではなく、第三調査会社の厳正なチェックの元に公開される実数で、このことがこのショーの権威と信用を高いものとしている。そして出展者もまた、この数字を正しく自分たちのビジネスに反映させることができるのだ。

よくあるオーバーエスティメイトの数を発表する楽観主義は、かえってビジネスの本質と問題点を見え難くし、結局は正しい判断を損ねてしまうことになりかねない。High Fidelity は音質だけでなく全てに当てはまるのではないだろうか。そして、そこに感動が生まれるのである。

ミュンヘン・ハイエンド、今年もここで生まれた新たなオーディオの熱風が世界を駆け巡る。

(写真 1) 今年のポスターと M.O.C 会場。今年ハイエンドショーは第 32 回を迎え、M.O.C の会場に移ってからちょうど 10 回目の節目の年となった。



(写真 2) 来場者を迎えるアルプホルンのバンド。このショーの大きな特徴のひとつが、会場のあちらこちらで生演奏が聴けることだ。今年はアルプホルンとしては珍しい女性バンドが加わり来客を喜ばせた。





(写真 4)

ナグラの小型ラインアンプ MELODY
フォノイコライザー回路も装備されている。

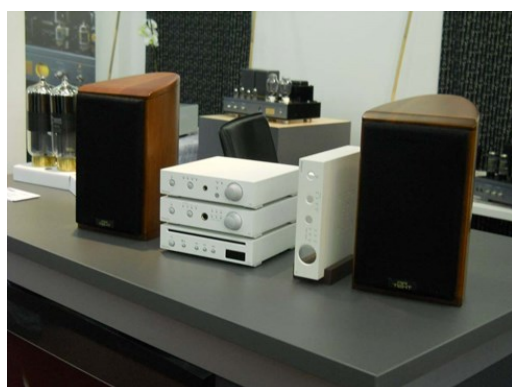
(写真 3) 未だアナログプレーヤー健在。
今年も多くのアナログプレーヤーが展覧され、
人気を集めていた。



(写真 6)

あのダン・ダゴスティーノが新しく興した
アンプメーカー、そのブランド名もダゴス
ティーノ。今年は野心的なプリアンプを
完成させた。フロントセンターに配した象
徴的なメーターはそのままだ。その音も
まさにダゴスティーノ・サウンドと言える。

(写真 5) 高音質ケーブル設計の草分け的
エンジニア、オランダのファン・デン・ハル。今年
開発中の秘密兵器はその名もナノ・ケーブル（右手
のボビン）。まだ詳細は秘密とのことだが、極細の線
を取り出して見せてくれた。



(写真 7)

早くもハイエンドショーに現れたオラソニックの
ナノコンポ。USB-DAC 内蔵プリメインアンプ
NANO-UA1、CD トランスポート NANO-CD1、
ヘッドホンアンプ内蔵 DAC NANO-DA-1 が展示
されていた。白色の CD ジャケットサイズが人目を
引き大型コンポの中で大きな注目を集めていた。



(写真 9)

普段入手困難なオーディオレーベルの SA-CD やアナログディスクを見つけることもこのショーの大きな魅力である。何店もの出展者がこれらのソフトの即売をしている。毎年顔を合せているので、こちらの趣味に合ったソフトをわざわざ用意しておいてくれるのも嬉しい。

(写真 8)

このショー会場の特徴は、展示場を兼ねた大きなミーティング広場があることだ。毎年明るく楽しい雰囲気にも包まれている。



(写真 10)

今年のショーで最も話題を呼んだ超弩級アンプ、PIVETTA OPERA ONLY。イタリアの奇オアンドレア・ピヴェッタが2億円の試作費と20年もの開発期間を経て作り上げたトータル160,000Wのアンプ。スイッチを入れると、タイムマシンのような大型円筒アンプがおもむろに上下2段に別れ、そしてさらに3方向に開く。まだ試作品ということで発売は決まっていないとのことだが、これこそまさにハイエンド。



(写真 11) 今年も多くの中級車用ハイエンドオーディオが紹介されたが、中でもハンブルグのディーラー、オーディオリファレンスが、イタリアの高級スポーツカーPAGANI FUAYRA にソナスファールの特注システムを搭載したものに人気が集まっていた。価格は 140 万ユーロ（約 1 億 8200 万円）。このような、超高級車のドライバーシートに座れるのも、このショーの魅力の一つなのだ。



(写真 12) このショーと並行してミュンヘン市内のマリオットホテルで、ハイエンドユーザーを対象とした HIFI DELUX というショーが開かれている。こちらにも多くのメーカーやディーラーが参加し、MOC とマリオットホテルを無料シャトルが運行している。ミュンヘンの地元メーカー、リンデマンは最近はこちらに出展しているが、今年は従来のモデルに加え、小型のラインを出展、なかなか切れ味の良いサウンドをデモしていた。左右はブックシェルフ型スピーカ BL-10、テーブル上は新製品 D クラスデジタルアンプ musicbook 50 (左) と USB プレーヤー (DSD 対応) musicbook 20 (中央)。時代のニーズを反映したモデルと言えよう。

